

はじめに

「多民族社会における宗教と文化」をテーマとする共同研究は、2011年度で16年目となった。本年度は、前年に発生した東日本大震災の影響も一段落つき、ようやく通常の調査研究活動に戻りつつあった一年と振り返ることができる。発災から時間が経つにつれ、大学全体、教員・学生個人それぞれへの隠れた影響の大きさを実感することもあったが、無事に二度の公開研究会を開催することができた。

本共同研究の活動として、2012年10月末、本研究所の主催、日本文化人類学会東北地区研究懇談会の共催として、学外からの研究者、松前もゆる氏（盛岡大学文学部准教授）と伊藤まり子氏（国立民族学博物館外来研究員）の二人をお迎えして、ジェンダーの問題を統一テーマとした公開研究会を行った。また、2013年1月には、滝澤克彦氏（本学非常勤講師、東北大学研究員）を報告者として、19世紀のモンゴルにおけるキリスト教をめぐる公開研究会を開催した。

本年度に開催された公開研究会のうち、10月開催のジェンダーに関する報告二件について、その内容を改めて論文として書き下ろしていただき、研究会における質疑応答の内容も併せて、今号に掲載する運びとなった。

松前もゆる氏の論文は、ブルガリア農村の女性たちが、社会主義から資本主義へという大きな変化のなかで、国外への移動などを含めて柔軟な生存戦略をとりながら、したたかに生きていく姿を報告している。また、伊藤まり子氏の論文は、ベトナムにおける女性たちによる宗教的な集いというある種の「場」を取り上げたうえで、そこに生きる女性たちの間の交流のあり方や、価値観に踏み込んで、描写をするものであった。いずれの論文についても、現代を生きる女性がおかれた複雑で多面的な状況を的確に捉えた、興味深い内容である。

執筆者には多くのご苦勞をかけることとなったが、無事に二本の論文が『多民族における宗教と文化』に掲載できたことを、感謝したい。

共同研究代表 市野澤潤平